



### 発行者

北海道へき地・複式教育研究連盟  
<http://dohekifuku.zenhekiren.net/>

委員長 温泉 敏  
 編集責任者 中川 真人  
 印刷所 山東印刷株式会社  
 夕張郡栗山町中央2丁目245 TEL 0123-72-1151  
 題字 書家 濱谷 彩鶴 (はまや さいかく) 氏

## 大会に関わっていただいた 全ての方に感謝

北海道へき地・複式教育研究連盟委員長 温泉 敏



『オホーツクの大地に育つ子どもへ 未来を切り拓き夢を実現する学びを』のローガンのもと、第70回全道へき地複式教育研究大会オホーツク大会を、9月16日・17日の両日に開催をいたしました。

研究紀要にも記しましたが、本大会はリモートによる分散会（ブレイクアウトルームを活用した交流も実施）や授業のライブ配信、諸事情で授業ライブを見る事ができなかった方への「見逃し配信」、そして、授業のダイジェスト版の配信と多くの「初」の取組を行った大会でした。

この未知の運営にオホーツク大会実行委員会の皆さんは小西委員長、田中事務局長を中心に一丸となって取り組んでくださいました。また、研究推進委員の皆さんの真摯な取組がありました。その結果、大きな成果のあった記念すべき大会になりました。衷心より感謝申し上げます。

今回のライブ配信により、私たちの実践を北海道ブロック以外の会員の方にも観ていただき、ご意見等をいただくことができたということは、全へき連が合い言葉としている「全国はひとつ」をまさに具現化したものだと思います。

話は変わりますが、先日、「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて」という中央教育審議会の審議のまとめの案が文科省から出されました。その中の「はじめに」には次のような文章があります。

令和3年3月12日、文部科学大臣は、「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」と題する諮問を行い、中央教育審議会に対して、ICTの活用と少人数学級を車の両輪として、「令和の日本型学校教育」を実現し、それを担う質の高い教師を確保するため、教師の養成・採用・研修等の在り方について、既存の在り方にとらわれることなく、基本的なところまで遡って検討を行うことを求めた。

（下線は温泉）

私たちの日々の実践はまさにそうではないかと思います。いかがでしょうか。

結びに、本大会の開催にあたり北海道教育委員会をはじめ多くの教育関係機関・団体にご指導、ご支援をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

## 第70回全道へき地複式教育研究大会オホーツク大会を終えて



北海道教育庁オホーツク教育局  
局長 野上 義秀

第70回全道へき地複式教育研究大会オホーツク大会が、遠隔形式により、全道各地のへき地・複式教育の充実に尽力されている多くの先生方の御参会の下、開催されましたことに、心からお祝いを申し上げます。

また、北海道へき地・複式教育研究連盟におかれましては、長年にわたりへき地・複式教育の実践研究を積み重ねられ、本道におけるへき地・複式教育の充実に発展に、寄与していただいておりますことに、深く敬意を表します。

さて、今日、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」が到来しつつあり、令和元年度に始まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大など、先行き不透明で「予測困難な時代」となっている中、学校教育では、子どもたちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進し、指導方法や指導体制の工夫改善により、全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と、「協働的な学び」を充実させることが求められています。

このような中、本研究大会が、「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」を研究主題に、管内の6会場で開催され、公開授業では、「学習ガイドを活用した間接指導の充実に、子どもたちが主体的に言語活動を行ったり、課題解決したりする姿」「学習形態の工夫により、児童が意欲的に表現し伝え合うことで、学びを深める姿」などが見られました。

本研究大会で得られた成果を各地域や各学校におけるへき地・複式教育の一層の充実に向けた取組に積極的に活用されますとともに、全道各地域に広く発信していただきますことを御期待申し上げます。

結びに、北海道へき地・複式教育研究連盟並びにオホーツクへき地・複式教育研究連盟の今後益々の御発展と会員の皆様の更なる御健勝を祈念し、御挨拶といたします。



第70回  
全道へき地複式教育研究大会  
オホーツク大会  
実行委員長 小西 政策  
(雄武町立豊丘小学校)

北海道へき地・複式教育研究連盟の第70回という節目の大会を、9月16・17日の2日間、オホーツクブルー広がるオホーツク管内で開催できましたことに心より感謝とお礼を申し上げます。

オホーツク大会は、第10次長期5か年研究推進計画の3年次であり「実践・検証期」として、研究目標及び研究課題を踏まえながら、実践化に努め記録を累積することが使命であると考え、『オホーツクの大地に育つ子どもへ 未来を切り拓き 夢を実現する学びを』と大会スローガンを掲げ、3年間取り組みを進めてきました。

昨年度のプレ大会はコロナ禍の対応により一斉の実施ができなくなりましたが、実行委員会として会場校の校長と協議し、分散開催をして実践を積み上げることができました。

本年度こそは全道各地の皆さんをお迎えできることを願い、1日目の全体会・記念講演及び分散会、2日目の6会場での分科会を計画していました。しかし、全道的な状況を鑑み北海道へき地・複式教育研究連盟と協議を重ね、2次案内のように1日目の全体会と記念講演をとりやめ、分散会をZoomによるリモート開催、2日目の分科会を全国・全道の皆さんへLIVE配信し、管内の先生方のみに参加いただいて研究発表や開会式・研究協議を行うこととしていました。

大会直前、北海道が緊急事態宣言措置区域に加えられ、より一層強い対策が取られることが発表されました。オホーツク管内においても予断を許さない状況になり、道へき複連にお願いして、2日目の分科会をLIVE配信のみとしました。LIVE配信のみとはなりませんが、多くの皆様に見ていただいたことは大きな成果だったと感じています。

結びになりましたが、本研究大会の開催にあたりご尽力いただきました分科会会場校や協力校の教職員の皆様、ご支援・ご協力を賜りました北海道教育委員会、北海道教育庁オホーツク教育局、オホーツク管内各市町村教育委員会、全国へき地教育研究連盟、北海道へき地・複式教育研究連盟等、管内外の教育関係機関の皆様に、重ねて感謝とお礼を申し上げたいと思います。

# 基 調 報 告

第70回全道へき地複式教育研究大会

オホーツク大会

研究部長 堀田 大次郎



## 【オホーツクの歩み】

昭和20年代後半に、網走地区へき地・複式教育研究連盟として発足し、支庁再編に伴い平成23年度にオホーツクへき地・複式教育研究連盟に改名した。

平成7年度には第4回全国へき地複式教育研究大会北海道大会が行われ、平成21年度に第58回全道へき地複式教育研究大会網走大会が行われるなど、オホーツク管内のへき地・複式教育の充実・発展に寄与してきた。

## 【現状とこれまでの研究】

オホーツク管内においては、小規模校の統廃合が続き、加盟校の減少が懸念される。令和3年度加盟校は24校（小学校22校、義務教育学校2校）だが、令和3年度廃校が決まっている学校が2校ある。一方で、少子化により新たに複式学級を有することになる学校もあり、加盟への働き掛けも重要である。ICT機器の普及により、一人1台端末の活用や遠隔授業の展開など、複式授業の在り方も可能性が広がりつつある。そのような中で、本連盟の果たす役割は大きいが、組織拡大・充実に向けて実態や課題を直視し、改善を図る必要がある。

本連盟の研究推進体制は、管内全体を北網ブロック（北見市・網走市が中心）、遠軽ブロック、紋別ブロックの3ブロックに分け、管内研究大会は各ブロックの輪番制としている。それぞれのブロックが主体的に活動を推進し市町村内にとどまらず、ブロック内、管内に各校研究の成果を普及している。このような活動が礎となり、教育環境の維持につながっている。

新型コロナウイルスの影響で、様々な教育活動が制限される中、GIGAスクール構想の前倒しにより、一人1台端末が配付され創意工夫をしながら活用されている。へき地校にとっては、通信環境の問題はあるものの、これまで物理的に難しかった他校や他地域との交流や遠隔授業の充実に向けて大きく前進した。また、複式授業におけるわたりずらしや同時間接授業の展開においても端末

の活用が有効かつ不可欠なアイテムとして定着しつつある。本連盟においても、これらICT機器の有効活用に関する研究の推進が期待される。

## 【大会スローガン】

「オホーツクの大地に育つ子どもへ  
未来を切り拓き 夢を実現する学びを」

## 【オホーツク大会の研究内容】

北海道へき地・複式教育研究連盟第10次長期5か年計画に準じ、オホーツクへき地・複式教育研究連盟においても5か年計画の3年次〔実践・検証期〕として本大会に臨んだ。

令和2年度プレ大会では、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けながらも、6校の分科会場で本大会を想定した研究発表を行った。「主体的な学び」を推進するための授業の流れを示し、リーダー学習による授業展開や、同時間接指導による授業展開、2会場をつないだ遠隔授業などが行われた。

令和3年度本大会では、緊急事態宣言下であったため、分科会の様子をオンラインで配信し、全道・全国の関係者に視聴していただいた。初の試みではあったが、会場校ではこれまで進めてきた研究の成果を十分発揮し、プレ大会時の研究からさらに深化したものとなった。6会場計12授業を公開し、各校の研究主題に沿った授業が行われた。

詳細は、分科会の報告をご覧いただきたいが、事前に道へきHPより各校研究紀要や指導案を確認し、オンライン配信で授業を視聴することで、参加者にとっては有意義な学びにつながったと確信する。さらに、プレ大会・本大会の取組を通し、会場校や協力校の教職員にとってもこの上ない深い学びを得ることができた。今後、大会の反省や成果と課題を共有し管内へき地・複式校における教育の充実・発展に寄与していく。

## 【むすびに】

オホーツク大会開催にあたり、これまでになく実施形態となり、運営に関して多くの皆様にご迷惑をおかけいたしました。この場をお借りしてお詫びいたします。また、多大なるご支援、ご助言をいただきました北海道教育委員会をはじめ、関係の皆様にご心より感謝申し上げます。

# 分 散 会

## 【分散会Ⅰ報告 学校・学級経営】

### ■研究主題

「ふるさとで学び、新しい時代を拓く、  
開かれた学校経営の創造」

提言者 北斗市立石別小学校  
校長 齋藤 政 洋

### ■提言概要

学校教育目標をもとにした組織的な学校経営の取組、教育課題における校長の関わりについての提言。北斗市教育大綱に示されている基本方針「SDGsの理念に基づき『だれ一人取り残さない』教育の推進」を進めるため、「チーム石別で実践すべき重点」8項目、「石別だからこそできる教育」2項目を掲げ、焦点化した実践に取り組んでいる。

「チーム石別で実践すべき重点」8項目に関しては、学校教育目標、学校改善プランと連動し、指導の重点を明確にしながら教職員の協働体制を構築している。

「石別だからこそできる教育」2項目は、ふるさと学習の推進・充実と外国語教育の推進・充実を目指した取組である。外国語教育は1学年から行っており、年に数回全校外国語を行っている。ふるさと学習の推進・充実に関しては、地域人材を活用し、外部講師を招いて大当別川や前浜、校区内の野山の自然環境学習を行っている。また、自然環境学習でわかったこと、見つけたことをもとに観光マップを作成し、市役所観光課や観光協会との協働を進め、駅や観光案内所にポスター版やチラシ版を設置している。

### ■研究協議

〈討議の柱〉

「ふるさとへの愛着と誇りを育むための学習指導と評価の工夫・改善」「教科横断的な学びと開かれた教育課程実施への工夫・改善」

- ・CSの取組ではコーディネーターの担い手が重要。
- ・地域教育資源を活用しながら学校目標を具現化するために実態に応じたふるさと教育を推進しているが、地域教育資源の活用が困難な状況も出てきている。
- ・ふるさと教育、地域連携に関わっては、町ぐるみ、自治体ぐるみで推進することによって小・中学校間や高校も含めた連携をとることが可能となる。
- ・小中学校の教育活動の中にSDGsに関連する取組が行われている。SDGsに対する子ども達の意識化を図っていく必要がある。
- ・統合することで、校区が広がり地域として残したいものが消えてしまうことが考えられる。今後残していきたいものなどふるさと教育をどうつないでいくかが課題である。

### ■助言者より

学校教育目標をもとに、学校経営を重点化、スリム化している。学校課題のグランドデザインを作成し、見える化している。発達段階に合わせた低・中・高の明確な目標を設定している。以上の3点に着目し、教育活動に高い効果を発揮していることを説明した。ふるさと教育の推進については、教科を横断的に編成し、自らの学びや意見を発信できる子どもを育てるカリキュラムを作り、計画的に進められていることについての話をした。

全体協議については、自らの地域の興味・関心を高めていくふるさと教育は、子どもたちが異文化の生活や価値観を学ぶきっかけとなり、国際化が急速に進む中で、国を超えて相互に理解しあうことにつながると説明。次に、小規模校の強みとして検証改善サイクルを確認しながら、個別最適な学びと協働的な学びの推進、組織的・継続的な学びになるよう取組を進めていくことを呼びかけた。

## 【分散会Ⅱ報告 学習指導①】

### ■研究主題

主体的・対話的に深く学ぶ児童生徒の育成  
～課題提示の工夫による、協働的な学びのある  
授業デザイン～

提言者 根室市立海星小学校  
教諭 中田 宗 秀

### ■提言概要

海星小学校は、根室市中心部から10kmほど南西に位置する小中併置校である。児童は明るく素直でまじめ。教師の働きかけには素直に応じる一方で、やり方よりも解答を求めてすぐに教師に聞いてしまうなど、深く思考したり、対話したりしながら主体的に問題を解決しようとする場面が少ないことが課題となっている。そこで対話と協働の場を設定することで、主体的・対話的に学びを深化させようとする態度の育成に取り組んだ。研究仮説を「課題の内容や提示の仕方を工夫し、児童生徒の『聴き合う関係』によって協働的に問題解決的思考をする活動を組織することで、学力の底上げを図り、児童生徒はより深く学ぶことができるだろう」とし、「①聴き合い学び合う関係の育成」「②導入の工夫『問い』の設定」「③協働的な学びによる基礎・基本の習得」「④基礎知識の再理解を促す課題」を研究の4視点とし、視点①と③を中心に実践発表された。

### ■研究協議

〈討議の柱〉

- 「協働的な学びを生かした学習指導の工夫」
- ・話し合い活動など学習ルールの統一、根拠を手がか

りにして意見を述べる学習の定型を習得させ、「協働的な学び」につながる事が重要である。

- ・個別最適な学びに関する取組はいろいろな実践がでてきているが、協働的な学びを広げていく必要がある。
- ・担任が反対の意見を言う、架空のキャラクターを登場させる、また、異学年活動での交流、ICTを活用した遠隔での交流など、学び合う環境をつくり、広げていくことが大切となる。
- ・リーダーとなる子、話せる子の固定化が見られるため、子ども同士教え合う場合も、教える子と教えられる子の両方の主体性を大事にしたい。
- ・デジタル教科書を活用し一人一台端末で効率的に学習を進めることはできるが、実際の物を使って体験的に学習することも大事なことから、アナログとの併用などの工夫が課題である。
- ・タブレットの活用が盛んに行われるようになってきているが、通信環境の制限や、低学年のスキルを身に付けさせることなどはこれからの課題である。

#### ■助言者より

提言発表により改めてどんな学校でも主体的で協働的な学びが重要であることを学ばせてもらった。学び合う場と関係と環境をつくることについて、学び合う・聞き合う・～し合うという子供が主人公となる教師の具体的な指導について、誰一人取り残すことのないように学び合いのルールを明確にし、教師がファシリテーターの役割を果たしながら、分かりやすく教えるあまり個に応じた指導のみ行われてしまう課題を話されていたが、子供が聞き合うことに視点を置いた実践を行うことの意義について学ばせてもらった。

GIGAスクール元年であり、どのようなトライも正解の年である。タブレット端末を子供が積極的に活用することが求められており、また距離に関係なく情報の送受信ができる場所に強みがある。特にへき地・小規模校の教育には、大事な道具になる。学校の資源を更に拡充させるためにもぜひ使っていただきたい。

#### 【分散会Ⅲ報告 学習指導②】

##### ■研究主題

「主体的に学びを深めていくことのできる子どもの育成」

～ 楽しくわかる授業づくりを通して～

提言者 礼文町立香深井小学校

校長 菊地 俊雄

#### ■提言概要

本校は、宗谷管内礼文町の香深地区にあり全校児童9名2学級。学校は地域の中で中心的な役割を果たしている。児童は素直で優しく協調性がある反面、臨機応変な対応や場面に応じた受け答えが苦手である。このため昨年度(令和2年度)は表現力の向上を重点に校内研究を進めた。研究仮説①「学習内容との出会わせ方を工夫することで、主体的に学習することができる

だろう。」と設定し、課題設定・題材の工夫、個々に合わせた支援や手立て、ICT・タブレットの活用を行った。また、研究仮説②「集団思考時の支援を充実させることで話し合いが活発になり、理解が深まるだろう。」と設定し、自分の意見を発表、交流できる場面の設定、香小の交流・話し合いの型の活用に取り組んだ。

また、表現力の向上のため、全学年の国語の「書く」「話す」の評価の観点を生活科や総合的な学習の時間とのつながりを明確化した「教科の横断的な視点表」を作成した。その成果として、教師間で共通の指導ができ表現力の向上が見られた。一方で対教師とのコミュニケーションになりやすい、相反する意見になった時に相手の意見に合わせてしまう傾向等の課題が見られた。そこで令和3年度は「表現力の向上」から「知識を基にした思考・判断力の向上」に焦点をあてることにした。

#### ■研究協議

##### <討議の柱>

「主体的に学びを深める学習指導の工夫」

- ・ICT機器の活用は様々に取り組まれているが環境によっては差がある。
- ・子どもたちを包み込むようなルール作りを職員にビジョンとして伝える事が大切。
- ・深い学びに向けて、ICTを他校との交流や複式の解消のために活用していく。
- ・ICTを使い他校と交流や修学旅行の準備を行っている。また農業体験や地域の農産物のPR活動等地域の特色を生かした教育活動に取り組んでいる。
- ・各校の端末や回線の状況について交流。校内研修で質の底上げが必要である。
- ・複式授業の学習リーダーの活用が成果。課題は大きな集団に入った場合である。
- ・地域とのコミュニケーションを図るため動画配信を試みてはどうか。

#### ■助言者より

主体的学びを深めていく指導については、児童の実態に応じ、見通しを持たせることが間接指導の充実につながる。また、支援員やICTの活用により教えることと考えさせることのバランスよい授業づくりにつながる。意図的に自分の意見を発表し交流できる場面を位置づけ、学校として話し合いの進め方を統一することでどのような場面でも話し合いができるようになることが考えられる。その際に教師の組織的な取組が重要である。授業改善を進める時、学習状況を見取りながらの視点と授業評価による視点が必要不可欠。また教科等横断的な視点で思考判断力を育成するための表を作成して明確化し、教師が見通しをもって単元構想を行うことで効果的な学び合いができる。授業を観察した際、具体的な学びの姿について検証し授業改善を進めることが大切である。また、各種調査等客観的な資料をもとに分析を進め授業改善を図ってほしい。

# 各分科会報告

## 〈第1分科会：佐呂間町立若佐小学校〉

### 1 研究主題

『自ら学び共に高め合う子どもの育成』  
～「学習ガイド」を活用した間接指導の充実～

### 2 研究主題・研究の成果

本校は「学習ガイド」の活用と並行してICTを有効活用し、児童が主体となり学習を進めていくという新しい学びの姿を模索してきた。

この研究を踏まえ、本大会公開授業では、3・4年生（国語）、5・6年生（算数）の2学級を公開した。ICT活用の成果としてはjamboardを間接指導時に活用することによって、お互いの考えを可視化し、グループ分けが容易となった。それらをもとに直接指導において、さらに考えを深める活動を進めることができた。また、「学習ガイド」を中心とした学習活動は、「ガイド役」の児童を中心

にしての話し合い活動を進めることにより、間接指導時の「協力して学びながら、共に高め合おう」とする意欲的な児童の姿を見ていただくことができた。

研究協議は、佐呂間町立浜佐呂間小学校とオンラインでつなぎ、jamboardを活用して行った。公開授業Ⅰについては、1人1台端末の活用法について関心が寄せられた。公開授業Ⅱについては、学習ガイドの定着により、児童同士による主体的・対話的学びの深まりが見られ、有効であったこと等が協議された。

### 3 今後の課題

「学習ガイド」の形態を通して学びを一層深めるためには、6年間を見通して「ガイド役」をどのように育てていくかが大切な鍵となる。児童同士でどこまで学習を深めさせることができるのか、児童の発達段階に応じて系統的に整理していきたい。

また、ICT機器の活用については、学習のねらいを達成するためにいかに効果的に使うかという部分が今後のテーマになっていくと考えられる。どのように児童同士の考えを練り上げ「対話の深まり」にまで繋げていけるかが今後の課題になることが確認された。



## 〈第2分科会：湧別町立開盛小学校〉

### 1 研究主題

『グローバル社会で生きる英語力を育む』  
～英語に慣れ親しむ活動の充実と活用する力の育成～

### 2 研究の視点（一部）・研究の成果

- 視点 1**
- ・ALTとの連携
  - ・複式指導の課題と改善
  - ・開盛小ならではのカリキュラムづくり
  - ・フォニックス指導の実践
- 視点 2**
- ・目的や場面、状況を明確にした言語活動の設定
  - ・評価の在り方の確立

当日は、複式学級である3・4年の外国語活動と、単式学級である6年の外国語の授業を公開した。

4年間の研究により、間接指導時でもALTとの習熟活動をすることで、内容の濃い複式指導を行う『開盛スタイル』を確立できた。また、JTE（日本人英語教師）を置くことで、ALTの不在時でも複式授業のスタイルを変えることなく実施することができた。

指導案の様式も変更した。「どの場面でどのように評価するのか」「B評価（おおむね満足できる）はどんな姿か」など、変更前と比べてより焦点化し、細かく評価できるようになった。

### 3 今後の課題

振り返りシートやCAN-DOリスト等をファイリングしたポートフォリオ（『Travel Bag』）の活用が十分でない。児童が主体的に活用できるよう、タブレット端末を利用したデジタル版の作成も考えたい。

また、外国語活動・外国語の複式指導『開盛スタイル』や児童の英語力を支えているフォニックス指導が、次年度以降、教員やALTが変わっても継承されていくための環境を整えたい。



## 〈第3分科会：滝上町立濁川小学校〉

## 1 研究主題

『学び方を身につけ、意欲的に表現・伝え合うことを通し、学びを深める子どもを育む』  
～少人数・複式学級における算数科の授業づくりを通して～

## 2 研究主題・研究の成果

本研究主題での2年次となる。本年度は「見通しをもって学習に臨む」「課題解決に向けたスキルを獲得する」「思考を整理する多様な表現方法を獲得し発信する」力の育成及び向上を中心に、次の仮説に沿って研究を進めてきた。

**仮説1** 「単元・1単位ごとに学習の目標や流れを把握させることで、一人ひとりが見通しをもち、主体的に活動することができるだろう。」

児童のつぶやきや発言を生かした課題づくりを行うことで、児童自身が見通しをもって取り組める素地が育ってきた。また、1時間の流れをパターン化することで、主体的な学習姿勢が身に付いてきた。

**仮説2** 「情報獲得の技能や思考・判断・表現等の方法を身に付けさせることで、自分の考えをまとめ、表現することができるだろう。」

思考の流れを意識した板書作りに努めた。また、日常的なノート指導の継続から、自分なりにまとめる力の定着と発達段階に応じた表現力の向上がみられた。

**仮説3** 「協働的な学びの方向性を共有させることで、考えを広げ、学びを深めることができるだろう。」

互いの考えに対し児童同士で、黒板を利用しながら質問や補足をしたり、一緒になって考えをまとめたりする力が身に付いてきた。1人学年の6年生においても、教科書やヒントカードなどを活用し、多様な考えに触れながら学習を進めることができた。



## 3 今後の課題

児童の発言やつぶやきが課題設定につながるよう、効果的な教科書の使い方、発問の在り方を明確にする。また、思考整理に生きる多様な表現方法が活用できるように、発達段階に応じた指導方法や教室掲示の工夫が今後の課題である。

## 〈第4分科会：雄武町立沢木小学校〉

## 1 研究主題

『主体的に課題に向かい、対話を通して学びを深める子どもの育成』  
～複式・算数科の授業を通して～

## 2 研究主題・研究の成果

**仮説1** 「話し合う目的を明確にし、ねらいや課題に応じた学び方を設定することで、対話を通して学びを補充・深化させるであろう。」

**仮説2** 「目的を明確にした同時間接指導を設定することにより、子どもの学びが補充・深化されるであろう」

本校では、3年計画の最終年次ということで、同時間接指導の時間の確保と有効性、対話の深まりを目指した「6年間を見通した対話活動」を設定し、これらをさらに深め、統合していくことと、その中でも教師が個に応じた指導を行っていくことで、どの教科にも通用する資質・能力を身に付けていく

ことを中心に研究を進めてきた。

当日は、複式学級である

3・4年

と5・6年の2学級の授業を公開した。

研究の成果としては、間接指導の際に児童が滞りなく学習できる学習システムの定着が見られたとともに、つまずいても「ヒント」の紙が用意されていることで児童が主体的に進めることができたようになった。

また、グループワークの際も学習リーダーが中心となって取り組んでいけるようになった。

## 3 今後の課題

公開授業では、同時間接指導を行い、その有効性について確認することができた。反面、同時間接の時間をどのように確保するのか、また1時間の中で振り返りや練習問題に取り組む時間をどのように確保していくのか、時間配分と学習内容の定着の面で大きな課題が残った。また、不易の課題として、同時間接指導ではどこまでを子どもたちに考えさせ、どこまでを支援するべきなのかなどについて、これからも複式教育が示唆するテーマとして、追究が必要である。



## 〈第5分科会：北見市立上仁頃小学校〉

## 1 研究主題

『ふるさとに誇りをもち

自分自身を信じ成長し続ける子どもの育成』

～主体的・協働的な深い学びのある授業をめざして～

## 2 研究の成果

**仮説 1** 学び方を充実させることで、児童は主体的に学ぶことができるであろう。**仮説 2** 他者とのつながりを設けることにより、児童は主体的に対話し深く学んでいくであろう。

本校は1年目に『主体的な学び』、2年目に『協働的な学び』、そして最終3年目の今年度は『深い学び』につながる授業について研究を進め、数多くの成果をあげることができた。

複式スタイルはHRTとALTとの連携を図ることで、児童が常にアクティブに学習することができる学びスタイルの確立につながった。また遠隔スタイルは、一人のみの学年であっても、オンラインシステムを活用することで、他校の同学年児童との豊かなコミュニケーションを図ることが可能となった。その他、様々な小規模校においても活用可能な実践に取り組むことができた。

この3年+αの期間、成果以上の失敗を繰り返しながらチャレンジを続けたことが、多くの成果をもたらすことにつながったと考える。



## 3 今後の課題

これまで、今児童に必要なと思われる指導についての研究に取り組んできた。本校は今年度をもって閉校となる。統合した後も、子どもたちが主体的で協働的な深い学びができるよう、課題設定の方法や学習リーダーの育成など、更なる授業改善に取り組む必要がある。

## 〈第6分科会：北見市立豊地小学校〉

## 1 研究主題

『ふるさとへ誇りをもち、主体的に学びを深める児童の育成』

～複式学級の特徴を生かした授業づくり・集団づくり～

## 2 研究主題・研究の成果

**仮説 1** 学び方を工夫することによって、児童はより深く、主体的に学ぶことができるであろう。**仮説 2** 学習の構成を工夫することによって、児童は夢や希望を広げ、ふるさとのよさを実感できるであろう。**成果** GIGAスクール構想で、高速光回線が急速に整備された。児童用PCのOSがWINDOWSからGOOGLEへ変わり、これまで用いて使い慣れていたアプリが、GOOGLE系に代わることで「入力」「操作」「通信状況」などが大きく変化した。

本校の校内研修が3年計画の3年次であり、これまでの本校で取り組んだ学習規律や授業スタイルの定着を進めるとともに、ICT活用も含めた研修を構築した。

今回の授業公開では、コロナ対策で参観者なしのオンライン学習となったため、児童と授業者の緊張は少なく、普段通り進めることができた。

5・6年生の授業では、7月に実施された合同修学旅行で直接交流が十分できていたことが幸いし、アイスブレイクが不要なくらい、児童はうちとけていた。また、リモート先の教師やALTとも十分に打ち合わせや交流ができた。3・4年生の授業ではALTとHRTがうまく協力し「HRTとALTの役割分担」をした複式授業ができていた。多くの児童にとっては「出会い」「入門」となる外国語であり、「使えるとこんなに楽しいんだよ。」「外国の人とも片言でこんなに伝わるんだよ。」ということをもってもらいたく、たくさんの言葉に触れさせるという教師の願いは達成できていたと思う。

## 3 今後の課題

今回のオンライン学習やタブレット端末を使用する授業に取り組むことにより、ICT活用に対する理解が広がるとともに、自信が持てるようになった。今後は、従来の授業スタイルとともにICT機器を使用したハイブリッド授業で、児童が自分の意見を書く、発表することや、児童の変容や成長を適切に評価していく方法について研究していきたい。







分散会Ⅰ：学校・学級経営（リモート）



分散会Ⅱ：学習指導①（リモート）



分散会Ⅲ：学習指導②（リモート）



開催地挨拶（リモート）



次期開催地挨拶（リモート）



オホーツク大会実行委員長へ感謝状贈呈



分科会の様子（リモート）



分科会の授業の様子

# 次期開催地から 第71回全道へき地複式教育研究大会胆振大会

## 胆振の地で皆様とともに学ぶ機会を楽しみにお待ちしています

第71回全道へき地複式教育研究大会胆振大会実行委員長 **前田道弘**

第10次長期5か年研究推進計画の3年次に位置づけられたオホーツク大会が、成功裏に終わりましたことに、心より敬意を表します。大会実行委員の皆様、そして各学校教職員の皆様の、用意周到なご準備と丁寧な運営で、成果を共有させていただきましたことに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

さて、オホーツク大会の成果と課題を引き継ぐ第71回全道へき地複式教育研究大会胆振大会は、全体会と分散会を洞爺湖町で、分科会を胆振管内6市町6会場において『産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から 子どもたちに未来へ飛躍する力

を』を大会スローガンに開催いたします。

今大会では、新たな形式となる共同研究や、その研究のさらなる深まりを目指した2年連続同一校公開授業、ICT時代に対応した研究大会のあり方を示す必要があります。あわせて複式教育の原点である「地域に根ざした、開かれた学校教育」の意味を踏まえ、へき地で学ぶ子どもたちのために、成果と課題を実感できる実のある、第10次長計まとめの大会となるよう努めてまいります。

北海道のへき地複式教育の充実と発展に向け、実行委員会一同、産業豊かな胆振の地にて、皆様のお出でを心よりお待ちしております。

### 胆振大会スローガン

## 『産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から 子どもたちに未来へ飛躍する力を』

### 開催期日

令和4年9月14日(水) 全体会・分散会 15日(木) 分科会  
令和5年9月13日(水) 全体会・分散会 14日(木) 分科会

分科会	会場校	研究主題 ～副主題～	分野・課題 教科等
豊浦	豊浦町立 礼文華小学校	目標に向かって努力し、学び進める子どもの育成 ～「主体的な学び」を実現する算数の授業づくりや 家庭学習の推進を通して～	学校・学級経営1 学習指導4 算数
洞爺湖	洞爺湖町立 とうや小学校	単式でも複式でも使える「学びの質を高める」 学習指導の探究 ～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～	学校・学級経営 学習指導6 全教科
伊達	伊達市立 大滝徳舜警学校	主体的に取り組む児童・生徒の育成 ～全教育活動での言語活動の充実を目指して～	学校・学級経営1 学習指導5 全教科
苫小牧	苫小牧市立 樽前小学校	自分の考えを表現し、互いに高まろうとする 児童を育む授業の創造 ～数学的な見方・考え方の追究を通して～	学校・学級経営1・2・3 学習指導5・6 算数
白老	白老町立 虎杖小学校	自ら考え学ぶ子を目指して ～指導事項を明確にした授業改善を通して～	学校・学級経営1 学習指導5・6 全教科
むかわ	むかわ町立 宮戸小学校	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた 指導法の研究 ～複式学級における個別最適な学び、協働的な学びを目指して～	学校・学級経営1・2 学習指導4・5・6 全教科